

3. 袋川流域の山々の伝言



外の五山物語



3. 袋川流域の山々の伝言

外の五山物語

- ① 扇ノ山 ②大茅山 ③宝山 ④稲葉山 ⑤面影山

① 扇ノ山

鳥取県と兵庫県の県境に位置する扇ノ山は、標高1309.9メートル、国府、郡家、八東、若桜の境となっています。

「扇ノ山」の名は、南北に連なるなだらかな尾根筋と、裾野に広がる広大な高原からなり、遠くから見ると扇の形に似ていることから名付けられました。また、邑美野の中心、源太橋あたりから眺めると、扇は半開きにゆったりとしたスロープで左右に広がっていくことから、「扇」とは因幡鳥取側からの命名ではないかといわれています。

新三紀末から新四紀にかけて盛んに噴火を繰り返して山が高くなり、噴出溶岩によってできた標高1000メートル付近の台地状地形は美しい高原となっています。麓には名瀑の雨滝があり、登山口の近くには河合谷牧場、それを過ぎると水とのふれあい広場があります。

山頂は雑木林に囲まれた円形の広場のようになっていて、南西方向に展望が開けて兵庫県側がよく見下ろせます。

袋川はこの扇ノ山に源を発し、国府町から雨滝地区にある県下最大の名瀑、雨滝から西流して鳥取市街地へ流れ出ていきます。



②大茅山

岩美町と国府町の境、雨滝北西に位置し、標高は664.1メートル。

昔は茅を刈り取る山であったということから、この名がつけました。

地形図には登山道が記されていませんが、国府町の木原のスギ林の沢から入ることができます。途中で道は消えてしまいましたが、尾根づたいに歩けるそうです。今では茅の山にヒノキの植林が進んでいて、山頂には何もありません。

③宝山

国府町清水と八頭郡八頭町山上の間に位置する標高294.6メートルの山です。



④稲葉山

美歎水源地の北西にあり、頂上から尾根筋にかけて平坦な稜線が続く、標高248.9メートルの山です。

「因幡山」「稲羽山」「伊奈波山」の他、宇倍神社鎮座まします山として「宇倍野山」「上野山」など多くの名で登場してきましたが、現在は「稲葉山」と呼ばれています。

『稲葉民談記』の「古来より大きな松山にて翠樹陰深い」姿は今はなく、近世の池田長吉時代に羽柴秀吉の鳥取城攻めによって荒れ果てた鳥取城の造営の用材として松や櫟などの伐採が進んで入会の採草地となり、薪や肥やし草などの恵みの山となりました。

その昔、多くの歌人に詠まれた山であり、因幡国守に就任した在原行平が詠んだ歌は百人一首の16番歌として知られています。

登山口は宇倍神社にあり、神社の石段上がると宇倍神社の手水鉢にも引かれている「七宝水」と呼ばれる水場に着きます。



⑤面影山

蜘蛛山の東尾根の小峰にあたり、中村山、正蓮寺山、倂(おもかげ)山などとも呼ばれている、
因幡国庁跡の東にそびえる標高100メートルの山です。

国庁跡から見ると、夕陽に照られた美しい姿を臨むことができます。

大伴家持の叔母である大伴坂上郎女の歌に、面影山を詠んだ歌があります。

「わがせこが おもかげやまの さかみまに
われのみこひて 見ぬはねたしも」

またほかにも面影山を詠んでいる歌がこの里に2首伝えられています。

「因幡よと 問ましものを こひしたひ わすれかたきは 倂の山」
「知るしらぬ 御法にもれぬ 教へにて 跡したわるる 面影の山」



面影山の二伝説



3. 袋川流域の山々の伝言

面影山の二伝説

①長慶院法皇の伝説

②八百比丘尼の伝説

①長慶院法皇の伝説

南北朝時代、甕山は北朝方に面影山は南朝方と関係があり伝説が残っています。

因州の守護民部少輔山名氏清公は、弟の氏冬に南朝第三代長慶天皇(当時はずでに長慶院法皇)を迎えに行かせ、丹後国桑田郡千歳村の千年山からこの面影山に招きました。

法皇は蒲生峠を越え、因幡国の岩美郡岩美町洗井の豪農井本家に宿泊しました。この時、旅でボロボロになった法衣を井本家に与え、今もそれは秘蔵されているといわれます。次いで岩美町長郷に滞在し、そこは“天皇ヶ平”と呼ばれ、また面影山では西麓の正蓮寺に隠れ住み、付近には“隠れ里”と呼ばれる所もあると伝えられています。さらに面影東麓の東今在家(ひがしいまざいけ)の御所に移り、“御所裡(ごっそり)”と呼ばれる由縁だということです。

②八百比丘尼の伝説

山の中腹に「八百比丘尼の住居跡」があります。面影山麓の居住する老女が大路山の鼠の岩屋で御馳走になりましたが、人魚の料理だけは食べることができず、懐に入れて持ち帰りました。

老女の一人娘がそれを食したところ、美しい娘のまま八百年生きたという、不老長寿の伝説が残っています。



内の四山物語



3. 袋川流域の山々の伝言

内の四山物語

- ①今木山 ②甑山 ③御陵山 ④手放山

①今木山

法花寺集落の東南にある標高88.9メートルの山で、古代に海を渡ってきた渡来人が住んでいた地として、「今来の山」ともいわれました。

昔はこの山に木が多く生え、稲を植えているようだったことから稲木山と言って今木山と書くようになったとする言い伝えもあります。

かつてこの地に今キ大明神という神社があり、地名を神号とする習わしがあったため、この里は今キといい、この地の山であるので今キ（衣）の山と言われていたと『因幡誌』にはあります。

また、『万葉集』にも詠まれている山です。



②甑山

稲葉山塊が大きく南に裾を落とし、袋川をねじ曲げるようにして打ち込んだ楔のようにそびえる標高110メートルの国府盆地の東の要衝的な存在の山です。

山名は、岡益の太田神社の太多羅大明神が近くの山をモッコで担いで国府町の町家までやって来た時にモッコの棒が折れて、担いでいた山を置き去りにしたという話や、武内宿禰が因幡の国に入った時、高草の鍋山に鍋をすえ、この山に甑(蒸し器)を置いて飯を焚いたという、国庁の里が製鉄や袋川の穀倉で栄えたことを示唆するような昔話に由来します。



③御陵山

標高90メートルの御陵山は、「石堂の森」とも呼ばれています。

壇ノ浦の合戦から逃れてきた安徳帝がこの地に留まり、崩御されたという伝説が残ることから、この名が付けられました。

麓には6m四方の基壇の上に厚さ40cmの壁石で囲まれた石室があり、石室中央の柱礎の上にエンタシス方式の円柱が立てられ、中台の裏の忍冬文(パルメット)の浮き彫りにされ大陸伝来説が強調された、山陰最古の7世紀後半の建造物である「岡益の石堂」があり、安徳天皇御陵参考地としての指定を受けています。

当初の石堂は寛文2年(1662)の大地震で倒壊し、現在のものは近代の復元であるため、正確に元来の姿を伝えているがどうかは不明であり、また天皇陵と石造物との関係も明らかではありません。

〔全国の安徳天皇伝説〕

壇ノ浦で安徳天皇の遺体があがらなかったということから天皇生存説が流れ、陵地の伝承が各地に点在しています。

鳥取県の他にも山口、高知、佐賀、熊本、長崎、鹿児島、宮崎県など10余県にあり、その内の5カ所が陵墓参考地として指定を受けています。

一般的には安徳天皇は文治元年(1185)3月24日、享年8歳で壇の浦で海中に没し、山口県下関市阿弥陀寺町の「阿弥(あみ)陀寺(だじの)陵(みささぎ)」という御陵に祭られています。



3. 袋川流域の山々の伝言

内の四山物語

④手放山

美しい山容から地元の人々からは別名「神垣富士」とも呼ばれている、標高461.2メートルの山です。

手放山は因美線東郡家駅の東北東約7キロメートルの位置にあり、西南西3キロメートルの宝山との間に袋川が流れています。



[山をどうして「せん」と呼ぶのか]

鳥取県と兵庫、岡山県にまたがる地域の山は「せん」と呼ぶ山が多くあります。

大山(だいせん)、船上山(せんじょうせん)、若杉山(わかすぎせん)、氷ノ山(ひょうのせん)、蒜山(ひるぜん)、泉山(いずみがせん)、毛無山(けなしがせん)、人形仙(にんぎょうせん)、那(な)岐(ぎ)山(せん)、甲ヶ山(かぶとがせん)、東山(とうせん)、扇ノ山(おうぎのせん)……

大昔からこの地方の人は山を「せん」と発音していました。また、仏教のお経の読みは全て呉音です。そこで山岳修験道場の山、例えば吉野大峰の弥山(みせん)、秋の宮島・巖島の弥山(みせん)、伊予の石鎚山の弥山(みせん)、京都東山の霊山(りょうぜん)等、「せん」が使われている山も多いのです。



因幡三山物語



3. 袋川流域の山々の伝言

因幡三山物語

①面影山

②今木山

③甌山

大和三山に思いを馳せた因幡三山として、因幡国庁跡を取り囲むように身近に見える山です。東に甌山、南に今木山、そして西に面影山がそびえます。国府に赴任してきた当時の人々にとって、この三つの山は国庁を中心に三角形に配置されているところや独立峰であるところ、さらにはなだらかな女性的な面影山と男性的な両側の甌山と今木山の山容が大和三山（耳(みみ)成(なし)山(やま)、畝傍山(うねびやま)、天香具山(あまのかぐやま))を彷彿させたことに因み、昭和30年ごろ高岡の川上貞夫氏により命名されました。



[大和三山]

①耳成(みみなし)山、②畝傍(うねび)山、③天香具山(あまのかぐやま)

奈良盆地南部にある天香具山(152m)・畝傍山(199m)・耳成山(139m)の三山の総称であり、畝傍山を頂点にして、藤原京跡を二等辺三角形に囲んでいます。

畝傍山や耳成山は旧火山のため独立峰ですが、天香久山は龍門山地の支脈が風化侵食された山で、古代から神聖視されてきました。

耳成山と天香具山を男性にたとえ、女性にたとえられた畝傍山の恋争いをしたという伝説になぞり、中大兄皇子が弟の大海人皇子と額田王の妻争いを詠った三山歌を『万葉集』に見ることができます。

他にも畝傍山の桜児伝説、耳成山の縵児(かづらこ)伝説など、美しい女性が複数の男性に求婚され、悩んだ末に死を選ぶという伝承が残ります。

三山はいずれも標高200mに満たない低山ですが、都の四季の情景として、都を離れた地での思い出として、または男女の三角関係にたとえられたりと、神聖であり親しみのある山として多くの歌人に愛され、詠まれた山です。



甕山の二伝説



3. 袋川流域の山々の伝言

甑山の二伝説

①巨人がつくった甑山伝説

②武内宿禰の甑山伝説

①巨人がつくった甑山伝説

岡益の太田神社の太多羅(ダイタラ)大明神(巨人ダイタラ坊)が近くの山をモッコで担いで歩いていた時、担ぎ棒が折れて、担いでいた山がこぼれて甑山となりました。

②武内宿禰の甑山伝説

武内宿禰が因幡の国に入った時、高草の鍋山に鍋をすえ、蒸し器(甑)を置いて飯を炊いた山が甑山といわれています。



3. 袋川流域の山々の伝言

甕山の二伝説

[河合谷高原]

扇ノ山山頂部の標高1,000mに広がる扇ノ山溶岩からなる溶岩台地です。高原は大山火山灰等に厚く覆われ表土はクロボクです。開墾され夏季には放牧地となっています。

河合谷高原の歴史は古く、伝承によると貞観年間(八五九~八七七)この地に、河合谷長者が住んで居いました。

その後何百年も広い茅野と森林で、雨滝村や鳥越村などの炭焼や山菜取り場となっていました。



[上山高原]

標高1,000mの上山高原は扇ノ山火山の溶岩台地です。台地上にはスコリア丘があります。自然散策の高原として好まれています。



「平」（がなる）と呼ばれる四丘



3. 袋川流域の山々の伝言

「平」（がなる）と呼ばれる四丘

- ①宝殿ヶ平（ほうでんがなる）
- ②崩御ヶ平（ほうぎょがなる）
- ③太閤ヶ平（たいこうがなる）
- ④天皇ヶ平（てんのうがなる）
- ⑤戦場ヶ平（せんじょうがなる）

鳥取地方では、ひらけた地域を「平」（がなる）と呼んでいます。
袋川流域にもこの名が示すように「平」（がなる）と呼ばれる、ひらけた丘があります。

①宝殿ヶ平（ほうでんがなる）

高岡集落の上方に見える、なだらかな丘のことを宝殿ヶ平と呼んでいます。名前の由来はよくわかっていないようですが、昔、高岡神社があった所といわれています。宝殿ヶ平は非常に見晴らしがよく、国府平野が一望できます。

②崩御ヶ平（ほうぎょがなる）

荒舟集落の南方の山頂に崩御ヶ平といわれる台地があり、壇ノ浦より落ち延びた安徳天皇崩御の地と伝承されています。そこには武王神社、皇居、平家城、崩御宮、寺院等多くの建物のほか、馬の調練場所まであったとも言われていますが、確かなことはわかっていません。



3. 袋川流域の山々の伝言

「平」（がなる）と呼ばれる四丘

③太閤ヶ平（たいこうがなる）

久松山の東北にあり、本陣山とも呼ばれています。約400年前、天正年間に羽柴秀吉が鳥取城を攻めた時に羽柴秀吉率いる織田勢がこの太閤ヶ平に陣屋を置き、久松城を守る吉川経家を大規模な包囲作戦と兵糧攻めで自刃に追いつめた戦の跡が残っています。

この山の山頂600坪を切り開いて陣屋を置き、土手の高さ3mの塹壕、土塁を築いて、周辺に空堀を廻らせました。その陣屋跡は今も残り、千成ひょうたんを模した土塁の跡が現存しています。山頂一帯は自然公園として整備され、市街地や日本海の眺めがよく、樗谿公園から久松山へ至るハイキングコースにも通じています。

④天皇ヶ平（てんのうがなる）

南北朝時代、因州の守護民部少輔山名氏清公は、南朝の長慶院法皇を面影山に招き、そのとき法皇は蒲生峠を越え、因幡国の岩美郡岩美町洗井、そして岩美町長郷に滞在したと伝えられています。そのため長郷のあたりは天皇ヶ平と呼ばれるようになりました。

⑤戦場ヶ平（せんじょうがなる）

『稲葉佳景 無駄安留記（むだあるき）』（著：逸處米質）では、羽柴秀吉の鳥取攻めの舞台となった丸山のあたりを、「戦場ヶ平鶴尾（ひよどりお）」と書きあらわしています。

『因幡誌』には「丸山」「千本松」と書かれ、険しい山容で簡単には登れず、夏になると蚊が多く、山に入る人はほとんどいなかったとありますが、『無駄安留記』の著者は頂上でゆっくりお酒を飲みながら楽しんでいた様子が伺えます。



流域の三峠物語



3. 袋川流域の山々の伝言

「平」（がなる）と呼ばれる四丘

- ①十王峠
- ②門尾三本松峠
- ③鶏冠尾の峠

①十王峠

雨滝集落から十五町ほど登った所にある十王峠は、雨滝街道（法美往来）の国府町と岩美町の堺にあたり、昔から但馬を通して京都に至る山陰道として、国府から国主を初め諸役人の往来や貢物の運搬などの重要な役割を果たしてきました。

戦国時代の末、豊臣秀吉が牛が峯や七曲城を攻めた時に、十王峠を登ったとも言われています。旧藩時代も但馬や岩井郡に行く通行の要路であったので、幕末には雨滝部落の峠道に番所を置いて通行人を取り締った事もありました。

十王とは、死者が冥途に行く時、この世でおかした罪を裁ばく閻魔大王など十人の王の事で、この王たちに裁かれて来世では善人になって生れてくるといわれています。山岳修験にゆかりの地でもあることから、あの世の入口と信じて名付けたられたということです。



3. 袋川流域の山々の伝言

「平」（がなる）と呼ばれる四丘

②門尾三本松峠

この峠は、江戸時代、若桜往来と呼ばれた道が通っていた所で、鳥取の城下町に入る最後の峠でした。

鳥取市祢宜谷と八頭町門尾の境に位置しており、峠には三本の松がありましたが、現在は二本の大松が残っています。法華宗供養塔・茶屋跡・孝夫塚・岡嶋家墓地なども残っており、峠は町の文化財に指定されています。

③鶏冠尾の峠

下木原から岩美町へ通じている道で、この峠の下には茅ん堂と呼ばれる小さなお堂があります。茅ん堂のお地蔵様は岩美町外邑(とのむら)のお地蔵様と仲良しで、ある日外邑が火事に見舞われた時には、峠を越えて外邑の地蔵を助けに行き、消化につとめたという民話が残っています。



十王峠と逸話



3. 袋川流域の山々の伝言

十王峠と逸話

- ①冥府への入り口伝説
- ②ケイ東塚の哀話
- ③太閤の一口水
- ④塚の向（つかのむこう）

①冥府への入り口伝説

十王とはこの世でおかした罪を裁く、秦広(しんこう)王(不動明王)・初江(しょこう)王(釈迦如来)・宗帝(そうてい)王(文殊菩薩)・五官(ごかん)王(普賢菩薩)・閻魔(えんま)王(地蔵菩薩)・変成(へんじょう)王(弥勒菩薩)・泰山(たいざん)王(薬師如来)・平等(びょうどう)王(観音菩薩)・都市(とし)王(勢至菩薩)・五道転輪(ごどうてんりん)王(阿弥陀如来)の十人の王たちのことであり、この峠があゝの世の入口と信じられていました。

②ケイ東塚の哀話

十王峠を越えて銀山村へ向かう道沿いに酒屋がありましたが、ある冬、雪が家を押しつぶして一家の人々は残らず圧死してしまいました。

その主人に“ケイ東”と法名がつけられたので、弔われたこの塚を「ケイ東塚」と呼びました。



③太閤の一口水

銀山村より登って十王峠の峰の右、道ばたの平地に清水が湧き出ています。

羽柴秀吉が城攻めのためにこの峠を越そうとした際、炎暑で武将達が喉を乾かしていたので、秀吉が鎗の石突きを地に突き通したところ、そこから水が湧き出しました。

その後、銀山が繁昌の時にここに鉛座を建てたので、鉛座清水ともいわれました。

④塚の向（つかのむこう）

十王峠の地蔵尊の前に「ケイ東田」と称した小さな田んぼがありました。また大杉谷口川の向いを「塚の本」といい、その右を「塚の向」と字名がついています。

この「ケイ東田」や「塚の本」のいわれを知る人は少ないようですが、通行人のために一里塚が大杉谷口に作られたので、この地を塚の本と呼び、「ケイ東田」については、この地にケイ東塚があったからといわれていますが、詳しいことはわかっていません。

